

「小児の両側下顎小臼歯の先天性欠如に対して」
— 矯正・インプラント治療を行った症例 —

伊東泰蔵
(いとう歯科医院 熊本市)

【目的】

永久歯の先天性欠如については、2010年日本小児歯科学会の調査では発現は10%の頻度であったと報告している¹⁾。

今回は、両側下顎に3歯小臼歯欠如が存在した稀な症例を経験したので治療経過について報告する。

【症例】

症例は14歳9か月、女子。主訴は物が咬めない。初診は2007年8月8日。現病歴では下顎の大臼歯が萌出し咀嚼障害を訴えて受診。口腔内所見は両側下顎第2乳臼歯の歯根が骨と癒着し低位した状態。その歯冠部上に第1大臼歯が近心傾斜を認めた。診断は叢生を伴う下顎左側第1、第2小臼歯と右側第2小臼歯の先天性欠如と下顎両側第1、第2大臼歯の近心傾斜とした。

【治療ならびに経過】

上下顎とも矯正用ブラケットを装着してレベリングを行った。次に左側下顎智歯の抜歯を行って治療後、臼後三角部付近に矯正用マイクロインプラントを埋入して大臼歯部のアップライトを行った。1年半後に低位乳歯の周囲骨を削合しないように抜歯を行い、矯正中の18歳2か月時にインプラント植立3本を行った。サイズは右側第2小臼歯と左側第1小臼歯が4.1mmの長さ10mmと8mm、左側第2小臼歯は4.8mmの長さ10mmを植立した。1か月後にプロビジョナルを装着し矯正器具除去後に上部構造を装着した。インプラント植立1年3か月後の経過時は19歳5か月であった。

【考察】

小児歯科学会疫学調査では先天性欠如の発現パターンとして1歯欠如の頻度は5.22%、2歯欠如は2.93%、今回の3歯欠如の場合は0.57%で欠如本数が増加するほど発現頻度は少なかったと報告している。

永久歯の先天性欠如が存在すると、ほとんどの場合先行乳歯が残存して咬合機能を発揮するが、その乳歯残存年数には限度がある。また先行歯乳歯のう蝕や歯内療法等により脱落して咬合異常を誘発させることがある。あるいは乳歯歯根の吸収から歯槽骨との癒着が発現しより以上の咬合崩壊を招くこともある。

本症例では、乳歯歯根の吸収が著明で抜歯となったが低位乳歯が認められた場合、乳歯歯根の初期吸収期に咬合平面まで拳上させる矯正治療が必要であったかと思われる。

低位乳歯が存在すると歯槽骨は低位となって、欠損部に骨移植が必要となり治療の複雑性が予想される。そこで、動的矯正治療後の欠損部の保定に確実性が保証できないためにCT撮影後検査を行った。その結果骨の存在を確認した後インプラント植立を行った。

上部構造装着1年5か月後の経過では、咬合も安定して良好であった。

【文献】

1)日本人小児の永久歯先天性欠如に関する疫学調査、小児歯誌,48:29-39,2110.

外傷による異物について

河本孝史
(小児歯科愛宕)

【目的】

外傷による歯のけがに伴い、注意深く観察すると、軟組織等へ異物の迷入が認められることがある。砂や泥などの異物が軟組織に入り込んだ状態で治療すると、特に皮膚では、あたかも刺青をした様に青黒く見えて、外傷性異物症(外傷性刺青)と呼ばれる状況になる。そこで外傷時の異物迷入についてまとめ、合わせて対処方法について報告を行った。

【対象および方法】

当院で平成20年10月1日から平成23年9月30日までの3年間に外傷治療を行った162件の中から特徴的な数症例を選んでまとめ、報告を行った。

【結果】

異物の迷入として最も多いのは砂や泥であり、そのほか小石、木片、金属片などが見られた。

【考察】

外傷歯の処置と同様に、創面や露出した骨への異物迷入の確認はきわめて重要で、あれば直ちに、可及的に除去すべきである。しかしながら肉眼では微細な異物の確認は困難で、当院では2.5倍の拡大鏡を使用して確認精度をあげ、歯ブラシで異物を掻き出す際にも、拡大鏡下で取り残しのないよう注意深い対応を行っている。また、エックス線を用いた軟組織内の異物確認も有効と考えられ、迅速な対応の中にも注意深い観察が必要と思われる。